

大堂銅鐘(だいどう どうしょう)

板橋区登録有形文化財(歴史資料・工芸品) 昭和59年12月20日登録

大堂銅鐘は、治部阿闍梨快賢の勸進により暦応3年(1340)に鑄造された青銅製の鐘で、銘文が池の間四区のうち、二区にわたり陰刻されています。銘文自体は、後に鎌倉建長寺の第四二世となった中巖円月(ちゅうがん えんげつ)の作で、字は三位親慶が執筆しています。また、鑄工は平次五郎行次です。

銘文の文頭には、「武州豊島郡赤塚泉福寺・真福寺両寺鐘銘」とあり、鑄造当時は両寺が大堂を管理していたことがわかります。真福寺は現存しませんが、泉福寺は近接する真言宗泉福寺(赤塚6-39-7)のことと考えられます。

19世紀前半成立の紀行文、『遊歴雑記』では、永禄4年(1561)に大堂が上杉輝虎勢によって焼かれた際に、鐘の乳が二・三カ所溶け落ちたと推定した記述があります。また、後に輝虎が本尊の靈験に感じ入り、本堂・僧房・鐘楼を再建したと略縁起に見られるとしています。

『遊歴雑記』などのいくつかの記録類に見られるように、大堂銅鐘は、江戸時代に古鐘として広く知られており、江戸市中から文人墨客がたびたび当寺を訪れ、盛んに拓本などが採られました。

銅鐘は、国の重要美術品(昭和24年5月指定)であり、現在は板橋区立郷土資料館で展示されています。

所在地:板橋区赤塚5-35-25 区立郷土資料館内
交通:都営三田線「西高島平駅」徒歩13分
国際興業バス「区立美術館」徒歩2分
[[高島平操車場⇄区立美術館⇄成増駅北口](増17系統)]

